

市民との対話を軸にした 都市経営



まるたにさとこ
丸谷聡子
あかし
明石市長(兵庫県)



たかはた ひろし
高畑 博
ふじみの
ふじみ野市長(埼玉県)



かねこ
金子ゆかり
すわ
諏訪市長(長野県)



司会・コーディネーター

かわい たかよし
河井 孝仁

東海大学文化社会学部広報メディア学科客員教授

地域の課題が多様化・複雑化する中、各種計画の策定や都市の重要政策を立案するに当たり、市民の声をいかに反映させるかが極めて重要になっています。その観点から、市民ニーズの把握、市政への市民参画の促進、市民との合意形成などを目的に、市民との対話を軸にした都市経営を進めようと、市長出席のもとでタウンミーティングやワークショップを開催する自治体が増えています。

座談会では、市民ニーズの把握や市政への市民参画の促進などを目的に、タウンミーティングやワークショップを実施する金子・諏訪市長、高畑・ふじみ野市長、丸谷・明石市長にお集まりいただき、各都市が進めるタウンミーティングなどの取り組み、効果的に対話を行う上での留意点、多様な市民の声を聞く工夫と今後の展望などについて、幅広く語っていただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

多様な市民の声を市政に反映する

河井 市民の声をまちづくりに生かそうと、市民との対話を軸にした都市経営を進める自治体は増えています。それでは、各都市の取り組み内容についてお話しください。

金子 私は市長に就任して本年5月で丸10年を迎えます。この間、駅前(東口)再開発、学校再編、保育園の適正配置、観光のランドデザイン



ンの策定など、重要施策を進める際には、公募市民による検討会を開いたり、ワークショップを開催したりするなど、市民協働で取り組んできました。

行政は市民から遠い存在になるほど批判を受けやすいものですが、市民との対話を軸に政策を推進することで、市民の側に安心感や行政への信頼感が芽生えてきます。一連の取り組みを実施する中で、そのような効果を実感しました。

一方で、市長に就任すると、なかなか市民の皆さんと日常的に対話の時間を持つことが難しくなるのも事実です。そこで、市民と直接顔を合わせて、意見を交換する機会を持つため、「ゆかり市長とまちかどトーク」(以下、まちかどトーク)を毎年開催しています。市が取り組む重要施策の状況を市民に伝えるとともに、市民の意見を施策の参考にすることを目的とした市政懇談会で、本年度(令和6年度)は市内5会場で計6回にわたり開催しました。さらに、2年前からは、新たな取り組みとして、市内で活動する団体・グループのもとに私が出向き、直接意見交換を行う「ゆかり市長の出張トーク」(以下、出張トーク)も始めました。



高畑 ふじみ野市は旧上福岡市と旧大井町の1対1の合併で、平成17年に誕生したまちです。私は合併協議会委員、旧上福岡市の市議会議員として合併推進に取り組んできましたが、合併が実現した後はその効果をより高めるようなまちづくりを進めたいと、平成21年に市長選に立候補し、市長に就任しました。

以来、長年にわたり続けてきたのが、私の政治信念でもあるタウンミーティングです。文字通り膝を突き合わせて、市の課題や未来について語り合う対話集会で、これまでに367回開催し、約1万2000人も市民に参加いただきました。また、そこで寄せられたご意見・ご要望を、着実に市政に反映してきました。

合併後のまちづくりは容易ではありません。特に1対1の合併ともなると、地域的なバランスをいかに取って市政運営を進めるべきか、難しい点もありましたが、市民との対話を基本に据えながら、旧



市町の制度の違いを越えて新たなふじみ野市流のルール構築を図るなど、市民協働でまちづくりを進めてきました。

本年10月にはふじみ野市誕生20周年の節目を迎えます。これ

市民が安心して発言できる 環境づくりに向けて 私が各団体のもとに出向く 「ゆかり市長の出張トーク」 を始めました。



金子 ゆかり
諏訪市長(長野県)

を踏まえて、本年度のタウンミーティングでは「未来に向けて 今、ここから」をテーマに、市が置かれている状況や課題なども踏まえながら、市民の皆さんと未来志向の意見交換を行いました。

丸谷 私が市長に就任したのは一昨年の5月です。従来以上に多様な市民の声を聞いて、市政を運営したいとの考えから、就任2週間後に「市

民とつながる課」を立ち上げるとともに、タウンミーティング「まるちゃんカフェ」を毎月1回以上、開催してきました。これまでの開催回数は20回、参加者も延べ1000人を超えます。

私が目指したのは、普通の市民が気軽に立ち寄ることができるタウンミーティングです。参加者が固定化しないよう、毎回、テーマを変えたほか、皆さんが安心して対話ができる環境整備として、進行役に専門のファシリテーターを起用するなどしてきました。また、対話を通じて、地域課題や市民ニーズを明らかにするだけでなく、「行政がすべきこと」「多様な主体で共創できること」「市民の皆さん同士でやっていただくこと」と仕分けしながら、具体的に課題解決の実現を図っています。

さらに、大人だけではなく、子どもや若者を対象とした「こども会議」(小・中学生)、「若者会議」(高校生〜29歳)も開催していることに加え、施策ごとに市民ワークショップも実施するなど、市民の多様な声を反映した「対話と共創のまちづくり」を重層的に進めています。

対話は聞く姿勢も大切に

河井 対話を進める上で、重視していることはあります。

金子 対話の場で、言いたいことを自由に言い合うことは重要です。しかし、話すばかりでなく、聞く姿勢も大切にしなければいけません。もちろん、聞き方にもいろいろあります。相手を論破するために、自分本位に相手の主張を曲



出張トークにはスケートボードを愛好する中高生グループも参加。練習環境の整備について話し合いが行われた(諏訪市)

解してしまったり、一方的に聞き流してしまったり。こうした姿勢では、合意点を見いだすことはできません。

私は「大きな耳」と「分かり合う自由な対話」を自分の政治の基本姿勢として大事にしています。いずれも市長選挙のマニフェストに掲げたものですが、大きな耳を持って、相手の言い分をしつかりと聞き取る。自由に対話をしながら、最終的には分かり合う。そうした姿勢があれば、相手と意見が違ってても、議論の落ち着きどころが見えてきます。それが対話において重要だと自分への戒めになっています。



タウンミーティングの開催は私の政治信念。これまでに367回開催し約1万2000人ももの市民に参加いただきました。

高畑 博
ふじみ野市長(埼玉県)

丸谷 対等な立場で、それぞれの考えを認め合うこと。これが対話の条件です。実際、相手の意見を聞くことによって、新しい気づきを得ることもできるし、共感や思いやりの心も生まれます。そこに対話の醍醐味があるし、それは私が目指す「やさしいまち」をつくる前提にもなります。

より良い対話を促し、さらにそこで出た意見

を政策に生かす上で、ファシリテーターの存在は重要です。当初は、外部の方をお願いしていましたが、本年度はファシリテーター専門職を2人採用しました。また、市民ファシリテーター養成講座も開き、約60人が認定を受け、さまざまな対話の場面でサポート活動を担ってらっています。一方で、行政の意識が低ければ、対話と共創のまちづくりは進みません。そこで、係長級職員を対象にした研修も行っています。

金子 職員への働き掛けも重要ですね。私も部長会議、予算編成会議などの場で、対話の重要性や私の考え方を職員に対し、重ねて伝えていきます。

高畑 良いコミュニケーションが取れば、相手の真意や本音を引き出すことができる。これも対話の効果です。例えば、タウンミーティングの場で、市の政策に対して、厳しく批判される方もいらっしゃいます。しかし、よく聞いてみると、誤解をされていることも少なくありません。そうした場合には、「私たちの発信の仕方が悪くて、そのように伝わってしまったのなら、本当に申し訳ございませんでした」と謝った上で、詳しく説明をします。すると、誤解を解いてくださるだけでなく、ご自身が抱えている問題なども率直に話していただき、そこに地域の大事な課題が見えてくる場合もあります。タウンミーティングの実施は、私が単独で市民の皆さんと対話をする形式で行っています。近年は、市民の声を聞きたいと傍聴に来る職員も増えてきています。



自治組織の集会所などに市長が訪問する形で行われるタウンミーティング。本年度は全58の自治組織を対象に開催された(ふじみ野市)

丸谷 対話の内容をどう整理して、解決に向けていくのか、という点も重要ですね。例えば、複数のタウンミーティングで同じキーワードが出てきたら、そこにテーマを絞って、新たに話し合いの場を設け、対話を重ねていく。こうすることでより、課題がよりクリアになって、解決の道筋が見えやすくなってきます。明石市では、このように対話の解像度を上げる工夫もしています。

市民が安心して発言できる環境づくり

河井 より多様な市民の声を聞くために、特に

大人だけでなく
子どもや若者を対象とした
タウンミーティングを開催。
市民の多様な声を
政策に反映しています。



丸谷 聡子
明石市長(兵庫県)

工夫していることがありましたらお話しください。
金子 まちかどトークは、基本的には地域単位で実施するタウンミーティングです。当然、自治組織の役員さんも参加しますし、長く続けていると、顔ぶれも固定化します。そうした場には、自由参加の市民が参加して、自分の意見を言うのは勇気があることだと思います。そこで、始めたのが出張トークです。市内で活動する団体

のもとに私自身が出向く方式のため、招いた皆さんにとっていわば「ホーム」の環境ですから、遠慮せずに安心して発言をされます。

丸谷 明石市でも、誰もが気軽に参加できるタウンミーティングを目指しています。子育て世代を中心に、多くの人に参加いただいています。中には参加をためらわれている方もいらっしゃるかもしれませんが、市長自らが「アウエー」の環境に赴いて、意見交換する諏訪市の取り組みは、大変参考になります。

高畑 ふじみ野市でも市内の各団体のメンバーとの意見交換の場として「ふれあい座談会」を開催しています。団体単位での申し込みですから、参加者は緊張せずに発言できるし、新しい顔ぶれも出てきたりと、いろいろメリットがあります。いずれにせよ、くつろいだ状態で意見交換することが大切です。例えば地域のお祭りなどにも、なるべく長時間滞在するようにして、多くの市民と言葉を交わしたり、要望を聞いています。

河井 明石市では大人に限らず、子どもたちの意見も市政に取り入れていますね。

丸谷 私は、子どもたちの声を広く伝えたい、政策に反映したいの思いから政治の道を志しました。実際、子どももしっかりと自分の意見を持つています。そこで、子ども世代のタウンミーティングとして「こども会議」を開き、そこで出てきた声を実現しようと、昨年は自然の中で自由に遊べる「1DAYプレーパーク」を市内4カ所に開設するイベントを実施しました。



小・中学生を対象にした「こども会議」の様子。そこで寄せられた声を生かして、「1DAYプレーパーク」を開いた(明石市)

「自分たちがやりたいと思っていたことが実現できてうれしい」と感想を寄せてくれた子どももいました。

高畑 ふじみ野市では、公園利用者への危険や周辺住居への迷惑防止などを理由に、公園でのボール遊びを禁止してきましたが、ボール遊びを望む子どもたちと地域住民による話し合いの場を設けようと、一昨年にワークショップを実施しました。その結果、ある公園に限ったことですが、園内の場所や時間を限定した上で、子どもたちがボール遊びをできるように、ルールを変更しました。子どもたちも当事者として対



河井 孝仁
東海大学文化社会学部広報メディア学科客員教授

話に参加し、新たなローカルルールの策定につなげられたのは、大きな一歩だと思います。

金子 出張トークには中高生の団体も参加して、スケートボードの練習環境を整備してほしいと訴えてきたことがありました。その場で解決には至りませんでした。私の方からも、実現に向けたアドバイスを行うなど、意見交換を行いました。参加した若者の一人は「今までいろいろなところで話をしてきたけど、一番成果があった」と話してくれました。

今後の展望について

河井 それでは最後に、これからの目標についてお聞かせください。

金子 市の職員は優秀です。例えば観光のグラウンドデザインを策定するに当たっても、先進事例を調べ上げた上で、すぐに素案をつくってくれます。しかし、私はそれをそのまま採用せずに、市民や関係者と対話を重ねて計画づくりを進めるようにと指示しました。市民や関係者が

関わらない形で計画を策定しても、地域に観光振興の機運は伝わらないし、観光事業者の主体的な取り組みが進まないと思つたからです。そこで、市民や関係者の声を丁寧に聞きながら2年間を要して協働で計画づくりを進めた結果、彼らの多くが当事者意識を持ち、一例としてその後の観光庁の支援事業に対する公募申請がスムーズに進むなど、大きな成果がありました。今後も、市民との対話をまちづくりに生かしていきたいと思っています。

高畑 私が理想とするのは、約11万4000人の市民が一つの家族のような「あったかい」まちです。これからも、市民との対話を大切に、また、仲間である市役所職員とワンチームで、市内の各現場に足を運び、市民に寄り添いながら、あったかいまちの形成に取り組んでいきたいと思っています。

丸谷 私はトップダウンではなく、ボトムアップの市政運営を目指しています。市長として「市民と一緒にやさしいまちをつくる」という大きな方向性は示しますが、後は職員一人一人が、その実現に向けて自分なりに考えて実行する。そうした市政運営を進めていきたいと考えています。当初は、なかなか思いが伝わらない時期もありましたが、「市長ゼミ」と称して、より良い対話や合意形成の仕方などについて、職員と共に学び合う時間を持つなどしたこと、組織風土も変わってきました。今後も職員と力を合わせ、市民との対話を軸にしたまちづくりを進めたいと思います。



河井 各市長のお話をお聞きして、市民との対話を軸にした都市経営とは、市の課題や市民の意見などをうまく引き出して、それを政策に結びつけることにあるのではないかと感じました。各市ともそのために、市内のそれぞれの現場を重視したり、市民が話しやすい環境を整えたり、市長と職員が学び合う時間を持つたりと、いろいろ工夫されていることが分かりました。今後とも、市民の意見をうまく聞き取り、まちの発展につなげていかれることを願っています。本日はありがとうございました。

(令和7年1月29日、全国都市会館にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は5月号に掲載予定です。